

【平安時代末期の平氏政権】

12世紀、

後白河天皇と崇徳上皇が

『地位を巡る確執』から対立し、

これに源氏・平氏らの武士も加わって争うという

保元の乱 (1156) が起きた。

↓この戦では

源義朝・平清盛らを味方につけた

後白河天皇が勝利した (→上皇になった)

↓しかしその後、

『後白河上皇の近習 (仕える者) の間で争い』が起こり、

各近習を支える武将である平清盛と源義朝が敵味方として争う

平治の乱 (1159) が起きた。

↓そして

平清盛はこれに勝利し、

1167年: 『武士として初めて』の太政大臣に就き、

これにより平氏政権が成立した。

↓彼は

摂津国 (神戸) の大輪田泊 (おおわだのとまり) を修築して

日宋貿易を行い (宋→当時の中国王朝)、

これが平氏政権を支える重要な経済基盤となった。

↓また、

多数の荘園と知行国 (支配地域) も経済基盤となった。

【国税 H21】 ○ (←このまま理解し、覚えて下さい)

平安時代において、後白河天皇と崇徳上皇とが対立し、源義朝、平清盛らがついた天皇側が勝利を得た。後白河は上皇となって院政を開始したが、その後、義朝と清盛が争い、これに勝利した清盛は、後に武士として初めて太政大臣となった。

【特別区 H20】 × (←波線部分が間違いですので、参考にして下さい)

鎌倉時代、源頼朝は摂津国の大輪田泊の修築を行い、初めて日宋貿易を行ったが、それで得られる利益は鎌倉幕府の重要な経済基盤の一つであった。

【特別区 H22】 ○

1167年に太政大臣となった平清盛を中心とする平氏政権は、多数の荘園と知行国を経済基盤とするほかに、摂津の大輪田泊を修築して、日宋貿易による利益拡大にも積極的に取り組んだ。